

高次脳機能障害を有する就労移行支援事業所 通所者に対する刺激等価性理論に基づいた 訓練の実施とその効果

- 岩村 賢 (株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員)
齋藤 祥子 (株式会社スタートライン FITIME渋谷)
勿田 文記 (株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所)

背景および目的

・背景

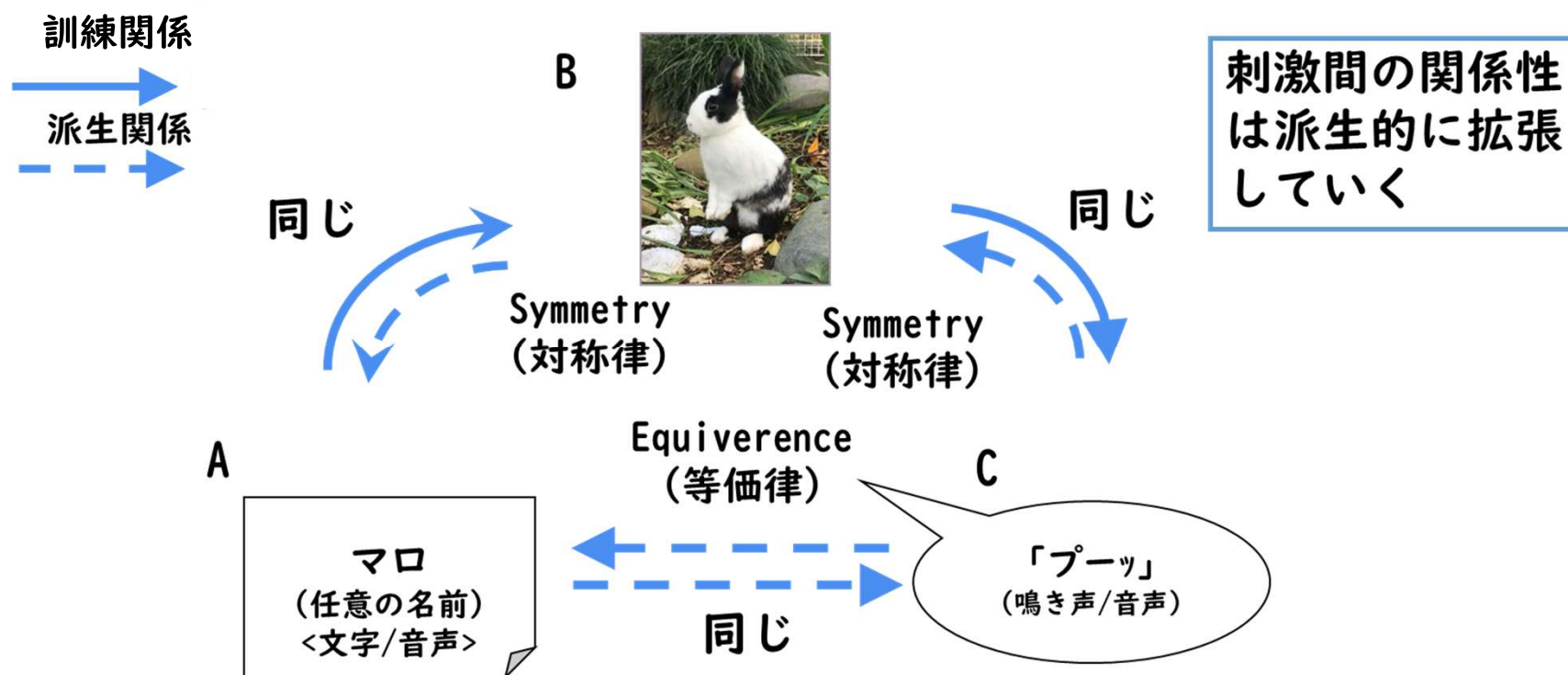
- ・ 刺激等価性理論に基づく訓練は、障害児・者が言語・認知機能を獲得、形成する際に有効な手段として利用されはじめている。
- ・ 刺激等価性スキルの獲得が不十分であったり、刺激等価性スキルが後天的に失われてしまうことで、業務上の課題が生じると考えられる。
- ・ 刺激等価性訓練を実施することで障害者の認知能力や職業準備性にポジティブな影響があると考えた。

・目的

高次脳機能障害を有する成人を対象にPC上で実施できる関係フレームスキル訓練効果を検討すること。

刺激等価性

物理的類似性のない2つ以上の刺激感で機能的に同一である反応が形成される
それらの刺激間で直接訓練されていない派生的関係が成立する



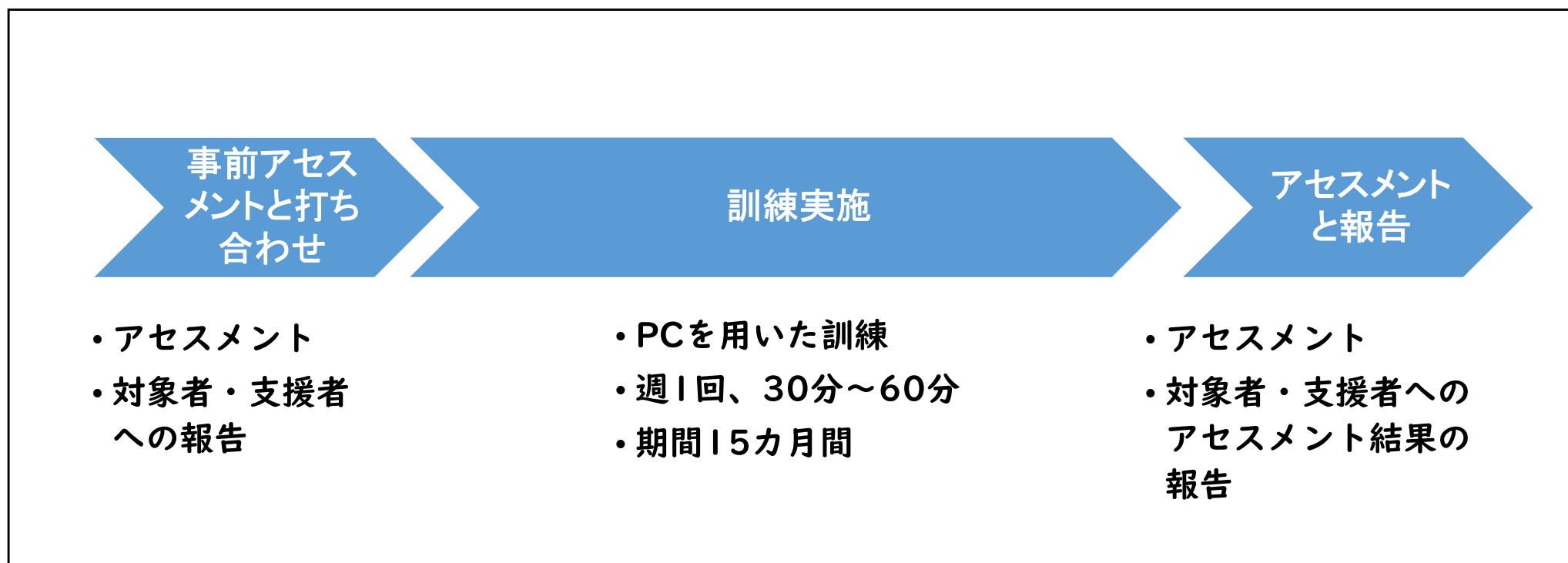
実線部分の訓練関係を学習した場合に、点線部分の派生関係が理解できる力

方法

- 参加者
就労移行支援事業所に通所している、
高次脳機能障害を有する50代の男性。
- 訓練実施前における就労移行支援事業所での課題
 - 口頭指示は最初か最後の一言が聞き取れるが、内容理解は難しい。複数の用語を出すと「わかりません」と回答する。
 - 指示の理解があいまいであった場合に、スマホを触るなど不適切な行動が見られた。
 - 自身の状態や感情などを他者へ適切に表出することが難しく、質問しても「わかりません」と回答する。
 - 訓練実施時、補完手段としてメモを活用したが、活用を促されメモを取ることはできるが、メモした内容から必要な情報を検索・取得することはできない。



訓練導入への流れ

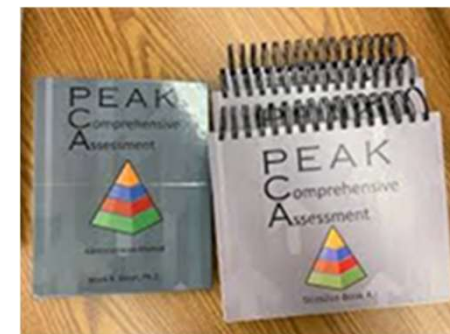


アセスメント方法

アセスメント：PCA

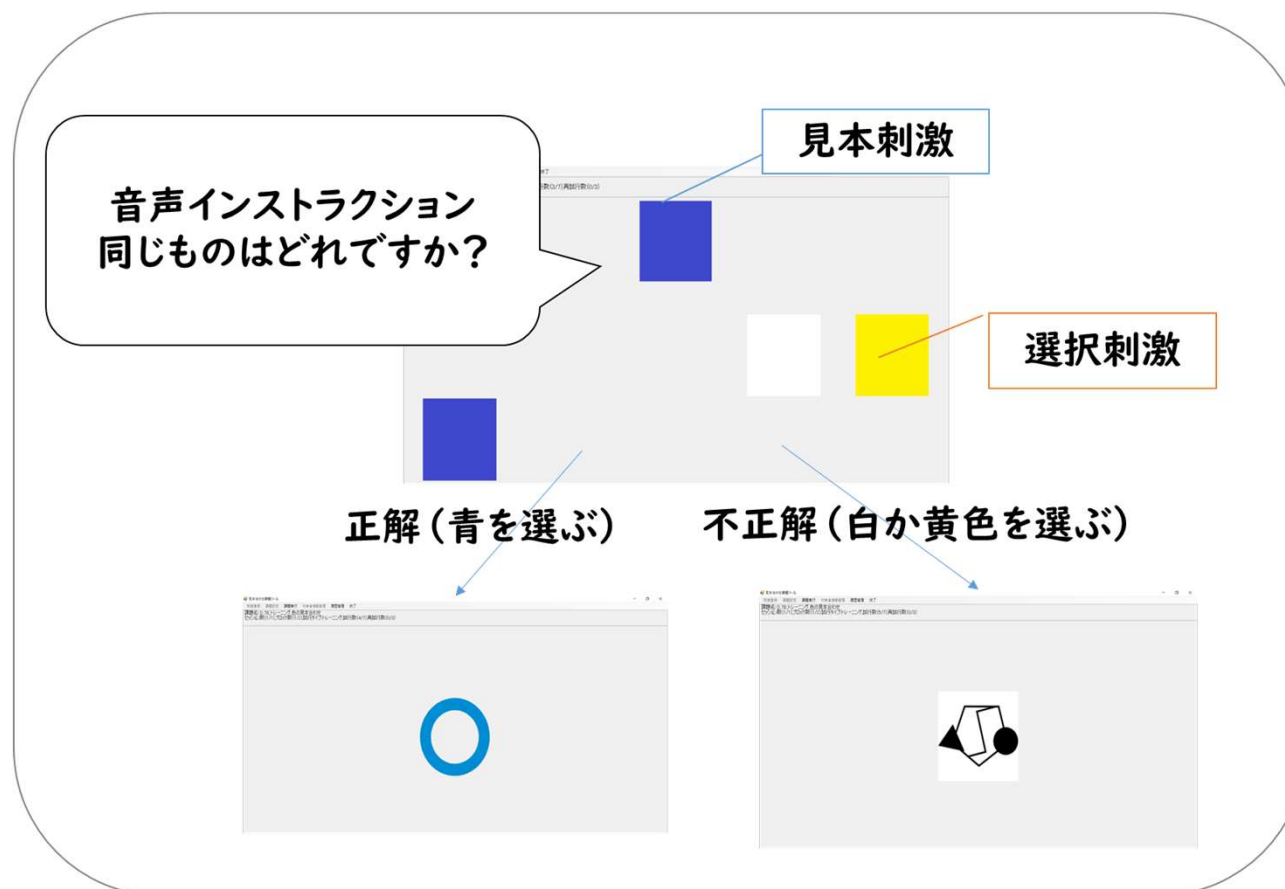
- 言語・認知能力を評価するツールであり、刺激等価性/関係フレームスキル訓練パッケージであるPEAKを基に開発されたアセスメントツールである。
- D（直接体験学習）、G（般化）、E（刺激等価性）、T（関係フレーム）の大きく4つのモジュールに分類されている。
- 関係フレームのモジュールは、図版を見て、正解を選択する形式の理解、音声の読み上げに対して音声表出で回答する表出の二つに分かれている。

本研究では、E、T理解とT表出の3つを用いて評価を行った。



訓練方法

- ・ PC上で実施できる刺激等価性理論に基づいた見本合わせ訓練を実施した。



結果

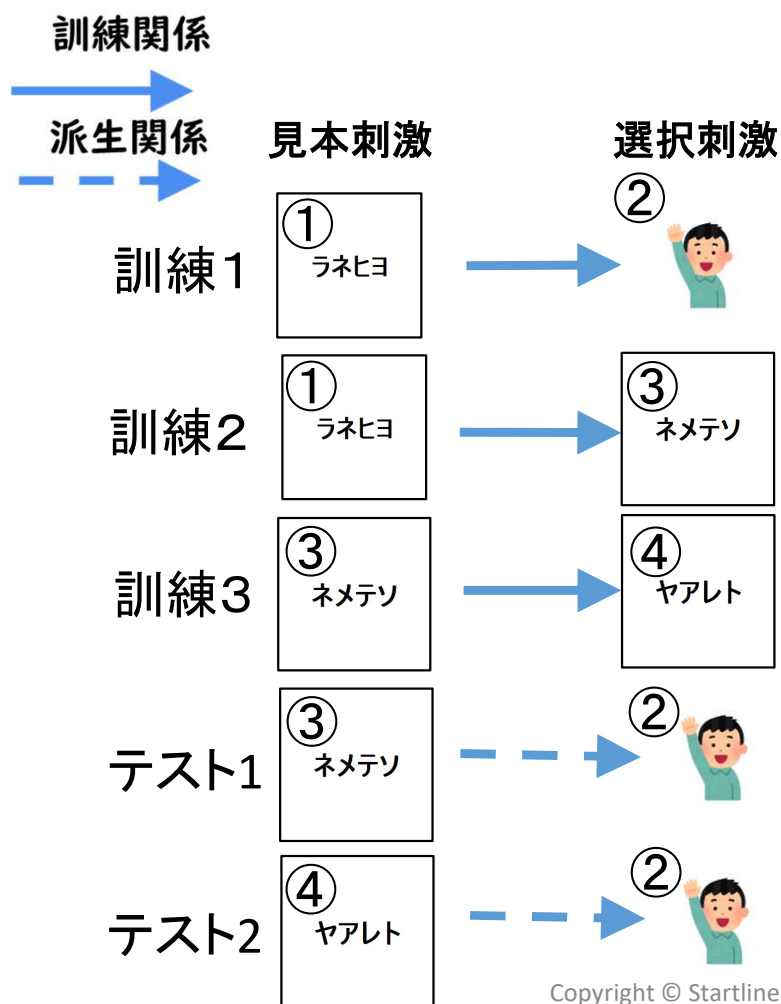
- 訓練の詳細

Aさんは、累計で82課題に取り組み、平均正答率は89.3%であった。正答率が100%にならなかった課題については、支援者の解説や補完手段を用いて、テストで100%になるまで訓練を続けた。

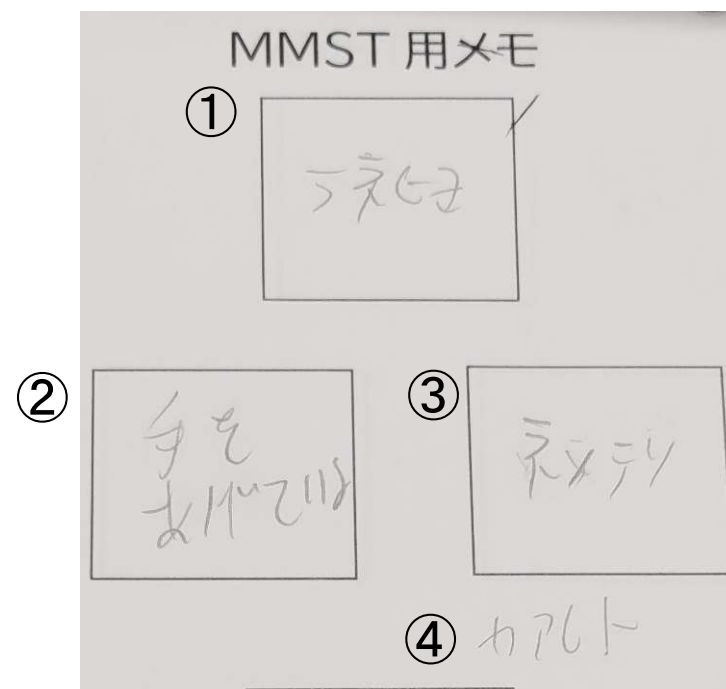
訓練内容	実施訓練 種類数	テスト時の平均正答率
対称律	15	86.5%
推移律	8	88.1%
等価律	59	90.2%

訓練内容イメージ

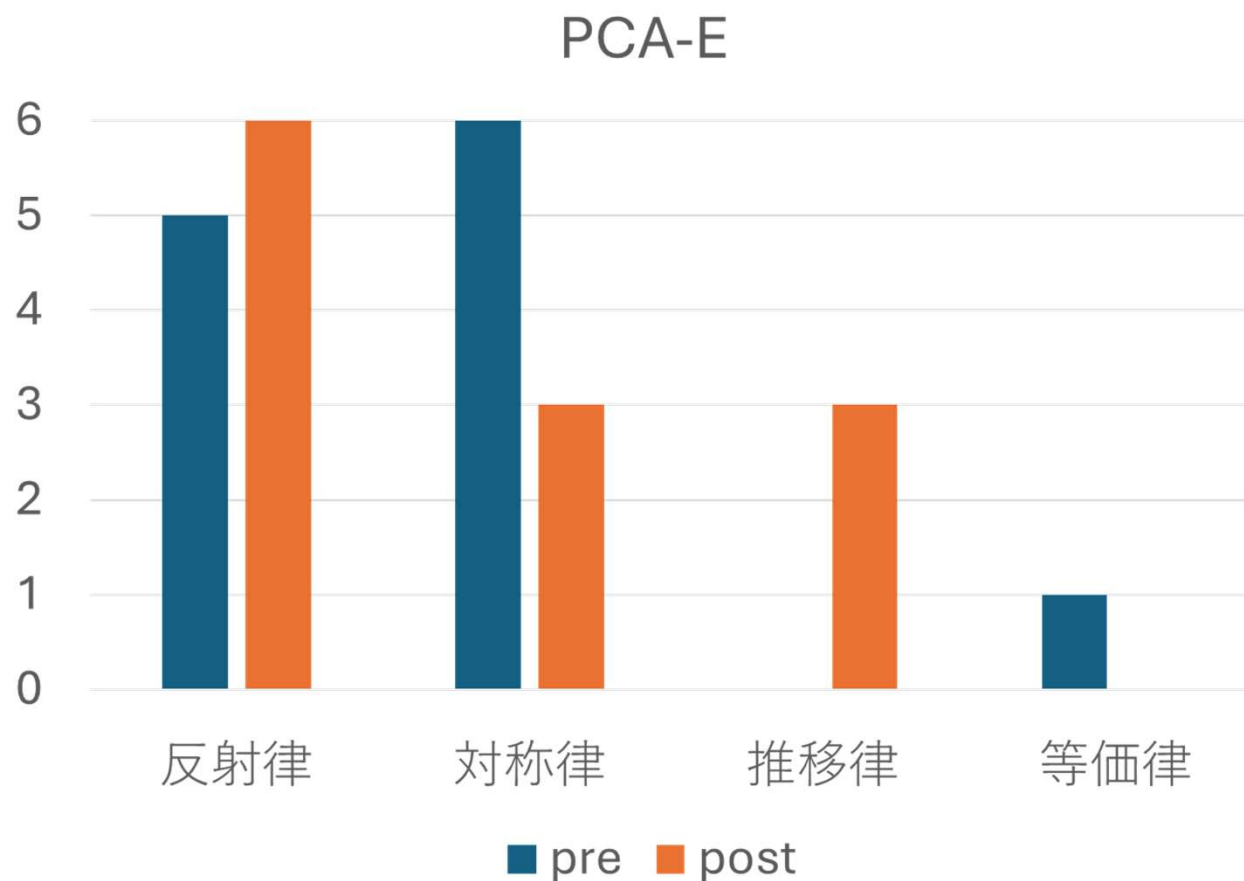
- ・ 最初は正答できなかった以下のような課題が、適切にメモを取ることで正答できるようになった。
→ 恣意的な刺激に関しても、補完手段を用いることで正答できた



ご本人が記載したメモ



結果

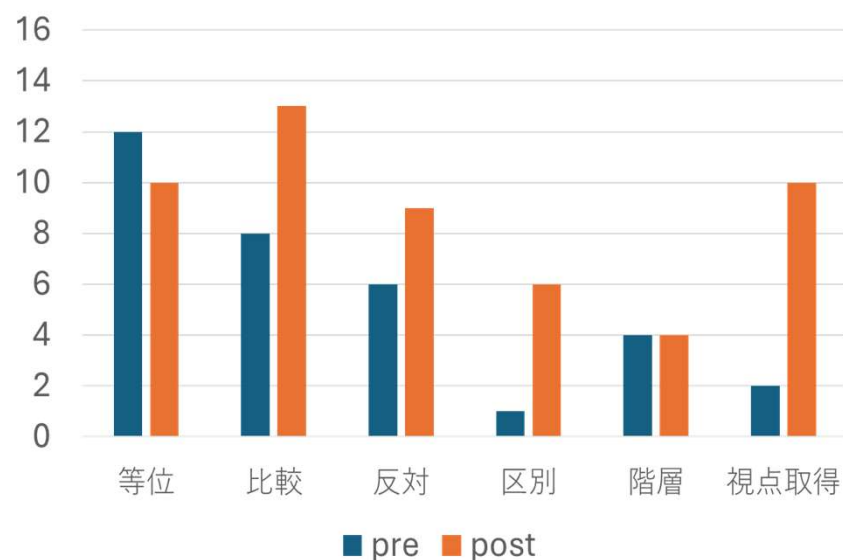


刺激等価性スキルの変化

モジュールEでは、対象律、等価律は低下したが、推移律の得点が向上した。

結果

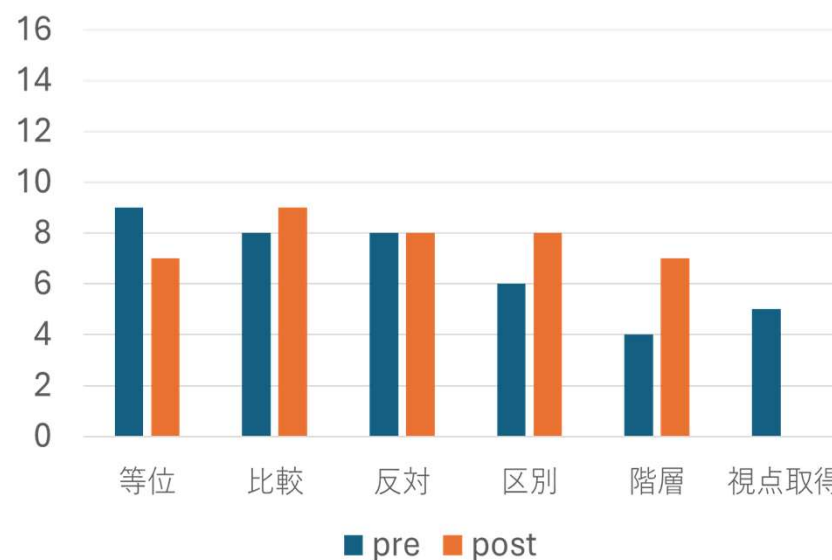
PCA-T理解



関係フレームスキル(理解)の変化

等位、階層以外の関係フレームの得点が向上した。

PCA-T表出



関係フレームスキル(表出)の変化

視点取得の得点は低下したものの、比較、区別、階層の得点は向上した。

結果

訓練前の課題	訓練後の変化
口頭指示は最初か最後の一言が聞き取れるが、内容理解は難しい。複数の用語を出すと「わかりません」と回答する。	「わかりません」と以前言っていた内容に関しても「どうやるんですか」と質問することが出来た。
指示の理解があいまいであった場合に、スマホを触るなど不適切な行動が見られた。	指示の流れが理解でき、スマホを触るなどの行動はなくなった。
自身の状態や感情などを外部へ適切に表出することが難しく、質問しても「わかりません」と回答する。	訓練中のグループワークでの感想を支援員に伝えるようになった他、使用する語彙が初期に比べて増加した。
訓練実施時、補完手段としてメモを活用したが、メモした内容から必要な情報を検索・取得することはできない。	メモに関して刺激同士のつながりを理解し、必要な情報を検索できるようになり、それを他の課題で活かすことが出来た。

考察

- PCA-Eモジュールでの推移律の得点の向上
メモ等を活用する中で、複数の指示のつながりを理解し、衝動的に「わかりません」と回答するのではなく、考えたうえで回答できるようになった可能性が示された。結果として、自発的な質問ができるようになったと示唆される。
- 未訓練のTモジュールの向上
本研究では、刺激等価性訓練のみを実施したが、フレームごとの変化に差異が見られたものの、未訓練の関係フレームスキルにも向上が認められた。刺激等価性スキルの訓練により、障害受傷以前に獲得していた関係フレームスキルが、様々な派生的関係反応として引き出された可能性が考えられる。つまり、刺激等価性スキル訓練が関係フレームスキルの再獲得を促したことが示唆される。

本研究の課題点

- 就労に向けた面接において、準備をしていない質問について、うまく回答することができない、という課題が見られた。これは、相手がどのような意図で質問をしているのか、という視点取得の関係フレームの弱さに起因しているものと考えられる。刺激等価性の訓練を、より精緻に積み上げ、関係フレームに関する訓練の導入が必要であろう。
- 刺激等価性の対称律、関係フレームの等位や視点取得などは訓練前より低下した。訓練を実施した刺激等価性についても、まだ習得が完全ではないと考えられる。結果として適切な行動が増加している一方で、訓練後のアセスメント得点が一部低下していることの原因に関して今後検討していきたい。
- また、本研究では刺激等価性スキル訓練が関係フレームスキルの再獲得を促したと考察したが、再獲得のメカニズムの評価手法について検討を行っていきたい。

【参考文献】

- 1) Dixon, M. R. PEAK comprehensive assessment.
Shawnee Scientific Press. 2019
- 2) Dixon, M. R. The PEAK relational training system.
Carbondale: Shawnee 2014-2016